

■ 論 文 ■

多言語・多民族社会、台湾の言語における共生のあり方 — 家庭内における多言語の語り合いの事例より —

齋 藤 幸 世*

1. はじめに

現代の台湾社会は、先住民諸語に加え、約400年間統治者が変わる毎に異なる言語使用を強いられた時代を経て、言語と民族の多様化が進んで来た。そして、現代においても、いまなお三世代家族の世代毎の主な使用言語に差異が生じている。

そこで、次に台湾の多民族状況を整理してみると、これまで台湾で主流とされて来たエスニック・グループの分類化は、「四大族群」¹⁾で、下記のようにその内訳は、外省人・本省人(福佬人)・客家人・16少数民族で、2017年現在の人口統計によると、その人口比率はそれぞれ約13%・約70%・約15%・約2%となっていることが分かる。また、使用言語も中国語・閩南語≒台語・客家語・先住民諸語(42種)と言われている。

実際に、現在台湾の国家言語とは、一つの言語ではなく多言語であり、台湾における全てのエスニック・グループの自然言語(手話を含む)と制定されている²⁾。本研究は、三世代家族で複数言語が飛び交い通じ合っている多言語・多民族社会、台湾に目を向け、たとえ家族や親族間でも、個々の使用言語が異なりながら会話が成り立っている状況が見られることに着目した。

そこで、家族や親族間の成員における言語の種類を問い直し、台湾社会の中で、特に台湾の三世代家族の日常の語り合いの事例を通して、多言語を共有しながら共生している家族の会話のあり様を明らかにすることを目的とする。

さらに、本研究では、言語と民族が多様化している台湾社会の言語における共生のあり方を検証するために、2種類の研究方法を用いた。まず、社会学的なアプローチとして、エスノメソドロジの会話分析を用い、成員同士がその相互作用として複数の異なる自然言語で暗黙の了解(以下ルール)のような秩序を共有し、会話が成立していると仮定し、エスニック・グループや自然言語

*関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程

1) 〈四大族群(エスニック・グループ)〉(王甫昌2003) *台語及び客語は筆者が加筆した。

第1グループ→外省人: 蒋介石率いる国民党と共に台湾に移住した者

→母語=ほぼ北京語以外の各種方言

第2グループ→本省人(福佬人): オランダ統治期福建省南部から台湾への移住者

→母語=閩南語≒台語

第3グループ→客家人: オランダ統治期に広東省北部から台湾に移住した者

→母語=客家語=客語

第4グループ→原住民族(先住民): オランダ統治以前から居住していた16種族

→母語=各原住民族言語

2) 中時電子報、2018年12月25日、「国家言語發展法(国家語言發展法)」: 2018年12月25日、立法院可決(2018年12月25日取得 <https://www.chinatimes.com/realtimenews/20181225001536-260407>)

(外省人・本省人・客家人・16先住民)が混在する三世代家族を抽出し、彼ら日常の会話を観察することとした。

また、言語学的なアプローチとして、言語の切り換えであるコードスイッチング (code-switching; 以下、CS) にも注目した。

本研究は、特に多言語・多民族社会の多様化における共生のあり方を検証するため、その会話における成員の役割と世代毎に受けた言語政策の差異による言語使用への影響を分析する。

2. 本研究の位置づけと先行研究

2.1 台湾の言語使用の実態と本研究の位置づけ

多言語・多民族の台湾社会に目を向けた時、例えば家族や親族間でも、個々の使用言語が異なりながら会話が成り立っている状況が見られる。そこで、日本と台湾の三世代家族の使用言語状況を比較してみると、日本の三世代家族の世代毎の使用言語は日本語で共通しており、多少の方言の差異があっても、同言語内の程度差であると推測される。但し、国際結婚や育った環境により母語の違いがあっても、そうでない場合に各人が全く異なる言語使用というケースは想定し難い。

一方で、台湾の三世代家族の世代毎の使用言語は共通しない場合が多い。例えば、中国語の範疇と見なされている方言であっても、その域を越えるかあるいは異なる言語の使用ほどの通じない状況が生じる。また、国際結婚ではなく、下記のように世代毎の被統治の歴史背景による使用言語が異なることで、母語の違いはなくとも母語よりも得意な言語を各人が混在させながら使用するというケースは想定される。そして、家族や親族間、あるいは友人や知人、社会での会話において、以下のように①一人の使用言語の中に異なる言語が存在する場合、②各々が全く異なる言語を使用する場合③例1と例2が混在する場合などが日常となっている。

具体的な事例として、筆者の研究の動機付けとなった出来事として、かつて目にした三世代家族で2言語に留まらず、3言語以上の複数言語が飛び交い通じ合っている光景が以下の図のようである。

〈三世代家族世代毎の差異：(第一世代が日本統治ではなく、それ以降の観察対象家庭も有り)〉

- ① 統治者、支配者、政府
 第一世代→日本統治 第二世代→国民党独裁政権
 第三世代→国民党または民進党政権
- ② 言語統制、言語政策、教育制度
 第一世代→日本語 第二世代→中国語
 第三世代→中国語及びそれ以外の母語
- ③ 認識されたエスニック・グループとしての存在
 第一世代→日本人 第二世代→外省人+本省人
 第三世代→外省人+本省人+客家人+16先住民

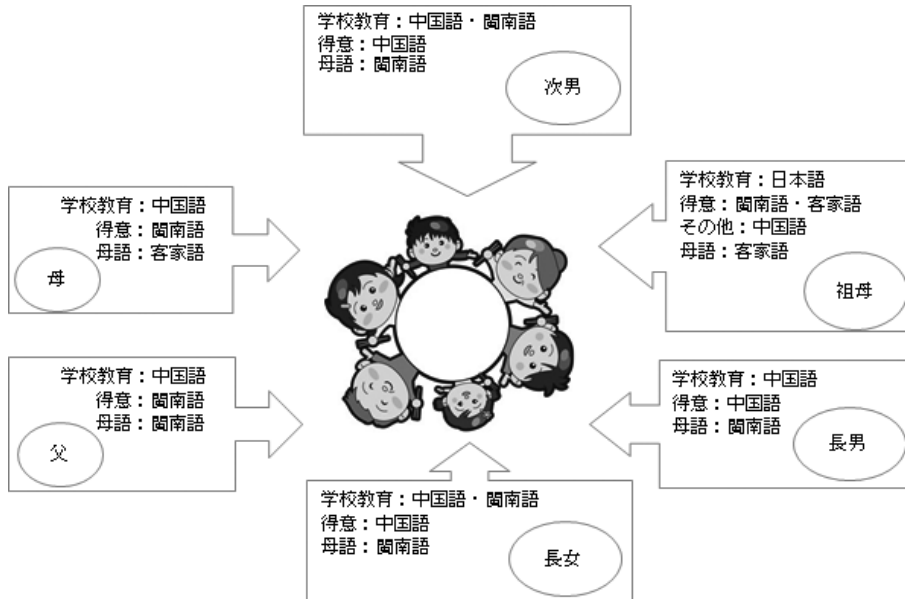


図1 三世代家族の多言語使用の事例

2.2 CS に関する先行研究

これまで、言語学的な側面でCSに焦点を当てた先行研究が一般的である。例えば、Shana Poplack, Blom, Jan Petter, John J. Gumperz 研究で有名だが、日本では東照二氏で知られている。関西学院大学では、国際学部の山本雅代教授も研究されている。また、会話分析の観点から、エスノメソドロジーの創始者 Harold Garfinkel やその継承者 Erving Goffman の手法を用いた研究も言語学と結びついて盛んに行われている。例えば、諸外国、日本、台湾などでも研究はされているがその対象は、国際結婚、移民或いは、帰国子女、在日韓国朝鮮人、華僑の方々の個人や親子間での発言や会話観察が主体である。

本研究では、まずこのような台湾の日常における三世代家族の会話でのCSに着目する。先行研究では、同じスピーチ内で中国語と各民族の言語の2言語間での単語、句、節の単位で混在する様子は描かれている。しかし、実際には得意な言語あるいは母語が異なる三世代家族間で、2言語もしくは3言語が使用される日常会話を観察し扱う研究は稀である。

ましてや、社会的に異なる言語使用を研究した例はほとんどなく、台湾も含め多言語・多民族社会における三世代家族の会話の実態をフィールド調査で通訳を交えず直接インタビューや観察をするような研究は未だなされていない。この点で、今後日本も多言語・多民族社会を迎える上でその実態を捉えることは有意義なことと考える。

まず、研究を進めるにあたり、2017年度中の調査研究目標の第一段階として、言語を軸に共同体の共生を図っていると想定し、研究対象を家族や親族に絞り、家庭内での使用言語状況を観察することとした。特に、その家族や親族間の成員における言語の種類を問い直し、台湾社会で、特に台湾の三世代家族の日常の語り合いの事例を通して、多言語を共有しながら共生している家族のあり様を明らかにすることが目的である。

そこで、本研究では特に使用言語、エスニック・グループ、階層、職種、経済環境、教育水準、居住地域などが偏らないように配慮し、バランスを考慮した家族を対象として選択し、その会話から彼らの言語使用の実態とそこに潜む暗黙のルールと歴史背景との関連性を見出す試みを行った。

まず、以下の第3章で調査方法と観察及びインタビュー対象者の背景に触れ、分析の枠組みも明確に提示する。第4章で、実際の会話観察について触れ、第5章でテープ起こしによるCSと会話分析を行い、第6章で考察し総括する。そして、第7章で今後の課題と展望を述べることとする。

3. 調査方法と観察及びインタビュー対象者の背景

3.1 フィールド調査概要

本研究の調査期間は、1回目9月19～24日と2回目12月7～12日で、その間にインタビュー対象者は下記の9名以外に大学院生と大学生、伝統文化継承者、観察対象者にも実施した。また、観察対象者は、7家族（第4章参照）、視察先は新北市客家園区（新北市）・台北市客家文化主題公園（台北市）台北客家文化館（苗栗県）・国立政治大学民族博物館（台北市）・台北市政府博物館（台北探索館）の5箇所である。

まず、プレ調査として、1回目の渡航で、現状把握のため下記の言語や民族の研究者や大学院生に対して、まず筆者自身の研究目的について説明し、主に以下の4点についてのインタビューを実施した。その際の使用言語は、互いに中国語であった。

- ①1949年～現在に至るまでの台湾における使用言語の実態と問題点を探ること。
- ②現在の台湾社会の民族とアイデンティティの問題点。
- ③言語政策に対する考察。
- ④本研究に対する意見。

また、彼らのインタビュー時の反応は、主に以下の3点である。

- ①本研究に対する意義と関心を持つ。
- ②訪問先や資料の紹介を快諾提供する。
- ③今後の研究への協力意思を示す。

これにより、現在の台湾社会で生じている言語、民族、アイデンティティなどの問題の背景を把握する。また、実際の観察対象の選択や会話分析の参考と後の研究を深めるため、彼らとの関係性を構築した。

〈主なインタビュー対象者〉

- ①国立台湾師範大学にて、東アジア研究科邵軒磊助理教授
- ②国立政治大学人文系にて歴史学部 周惠民教授
- ③中央研究院・近代史研究所 黄自進教授
- ④「台語」研究者（李江卻台語文教基金會執行長・台湾大学語文中心国際学生台語課程講師）陳豊惠氏
- ⑤台北市内国立政治大学民族学部主任王雅萍副教授

- ⑥苗栗県内小木偶幼児鍾林秀美園長
- ⑦新北市内烏来小中学校教師高秀玉氏（先住民小中学生カウンセラー）
- ⑧国立政治大学原住民族研究センター部前主任林修澈名誉教授及び現主任黃季平副教授

そして、インタビューの内容を踏まえて、2回目の渡航の観察対象者を選定し、本調査の計画に役立てた。但し、その三世代家族の選定にあたり、事前に現地の知人や言語や民族の研究者などに協力を仰ぎ、対象家族の使用言語や民族の組み合わせ以外に、下記のような点に留意した。

また、各家族の承諾を得て、各15分程度の会話を各家庭で撮影した。

- ①異なるエスニック・グループ：①本省人②客家人③16先住民
- ②異なる居住地域：台湾北部から南部（台北市・新北市・桃園市・苗栗県・高雄市）
- ③異なる条件：年齢・職種・教育水準・経済状況・生活環境・階層

3.2 分析の枠組み

本研究では、特に各成員の会話におけるCSに着目し、エスノメソドロジーの手法で会話分析を行う。これは、家族や親族間の成員同士が、CSに暗黙のルールのような秩序を共有し、会話が成立していると仮定し、そのルールを観察対象者や観察者の主観的あるいは印象的な理由ではなく、観察対象者が無意識にしているルールの要因に迫る。

また、観察の検証のために、観察データのトランスクリプトとして会話をビデオ撮影し、そのCSを分析することで、本人たちが相手との関係性や環境によって無意識で行っているという言語の使い分けの暗黙のルールを解明する。そのためにも、彼らの会話をテープ起こしにより、詳細に分析する必要がある。

そのために、特に次の2つの枠組みで分析する。まず、言語分析にさらに会話からの人間関係の要素も取り入れたBlom & Gumperz (1972)とGumperz (1982)によって定義付けられた状況的CS (situational code-switching)と会話的CS (conversational code-switching)を用いる。Gumperz (1982)は、エスノメソドロジーの手法の流れを汲み社会言語学を創り上げたが、コミュニケーションにおける「話し手」と「聞き手」の役割をその相互作用から捉える面で有効な分析方法と考える。

また、もう一方で会話の成員の概念として、Erving Goffman (1981)は、従来「話し手」と「聞き手」と二分化された捉え方に各々の立場として「地位」も加え分類化からも分析する。これにより、「話し手」は、①話題提供者 (author)、②発話者 (animator)、③話題への責任者 (principal)、④登場人物 (figure)の4種に分類化され、さらに、「聞き手」としては、「参加が承認された者 (ratified participants)」と「承認されていない者 (unratified participants)」に二分化される。また、「参加が承認された者 (ratified participants)」をさらに「指定された受け手」と「指定されていない受け手」とに下位分類する。

4. 実際の会話観察

4.1 観察対象者

実際に訪問し観察した対象の三世代家族（内1家族は四世代）は、下記の7家族で、それぞれの具体的な家族構成や使用言語あるいは家庭環境やCSの様子について、個別にその特徴を記述する。但し、今回外省人が家族に含まれるケースは選定できなかった。これは、外省人と他のエスニック・グループの配偶者が存在する家庭を探したものの、結果的に承諾が得られなかったためだ。その要因として、外省人の日本人に対する感情的な距離感がまだ影響していると推察される。

また、各事例の表中の「聴いて分かる言語」とは、各家族間の使用言語の範疇である。

1. 台北市内客家人家族（母語：客家語＝客語）
2. 苗栗県内小木偶幼児園鍾林秀美園長家族（母語：客家語＝客語）
3. 台北市内本省人家族（母語：閩南語≡台語³⁾）
4. 桃園市内本省人家族と申請者（母語：閩南語≡台語）
5. 高雄市内本省人家族と申請者（母語：閩南語≡台語）
6. 新北市内太魯閣族家族（母語：太魯閣語）
7. 台北市郊外省人家族（四世代）と申請者（母語：閩南語≡台語）

事例1：母語が客家語の家庭① 台北市内郊外

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語①②	聴いて分かる言語	聴いても分からない言語
A	祖父	客家人	70代後半	客家語	日本語 中国語	①客家語 ②中国語	閩南語	
B	母：娘	客家人	40代後半	客家語	中国語	①中国語 ②客家語	閩南語	
C	孫：小学6年	客家人	10代半ば	客家語	中国語	中国語	閩南語	客家語

対象者の背景と見解

- ・職業：祖父・父（他界）・母（娘）→会社員・祖母→専業主婦
- ・Bの夫が他界したため、実家に戻りA祖父母と孫とで生活しているが、Aは退職し、Bが会社員として家計を担い、比較的貧困家庭で旧式の簡易極小住宅で暮らしている。
- ・一世代目の配偶者が本省人のため、客家語を取って使用せず、家族の会話は、主に中国語となっ

3) 「閩南語≡台語」：「閩南語」は、日本では一般的に「台湾語」と言われているが、現地では敢えて「台語」という呼称も用いられている。これは、国民党政権によりその名称が当初「台湾閩南語」とされ、その後「閩南語」に変更されて、現在も公的には「閩南語」が用いられている。そのため、「台語」を母語とする者からは「台語」と呼ばれている。何故なら、「閩南語」は元々福建省の厦門、泉州、漳州の方言に加え、浙江省南部、広東省東部、海南省の話される言葉も含まれているため、台湾で実際使用されている「台語」とは必ずしも同一ではないからだ。

自由時報（電子版）、2011年5月24日、「社團痛批／馬政府去台灣化 台語改稱閩南語」、(2018年8月1日取得 <http://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/494941>)

民眾日報、1998年10月15日、「為『台語』正名」

ている。

・三世代目の小学生には、家長により学校の本土言語教育で客家語を選択させているが、毎週1コマという授業の少なさから、あまり効果を感じていない。

・家庭内での客家語の使用がないことと中国語が主流の台北市内という居住環境が客家語の必要性を感じさせない。

CS：○対象者自身の見解・●観察者の見解

○祖父と母（娘）との会話において、孫に聞かせたくない内容や客家語にしかない単語の場合に使用する程度である。

●観察中、非常に短い言葉であったが、AとBとの間で客家語を交わしていた。

○孫の学校での本土言語教育での母語は客家語を選択し、祖父と孫との会話で客家語練習の機会が生じている。（家長が新学期前に母語を選択し学校に提出）

事例2：母語が客家語の家庭② 苗栗県内

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖父	客家人	80代半ば	客家語	日本語	①客家語	閩南語	
B	父：息子	客家人	60代半ば	客家語	中国語	①客家語 ②中国語	閩南語	
C	母：息子の妻	客家人	60代半ば	客家語	中国語	①客家語 ②中国語	閩南語	
D	孫：長男の妻	本省人	30代半ば	客家語	中国語	①中国語	閩南語	客家語
E	親族：Cの従妹	客家人	60代前半	客家語	中国語	①客家語 ②中国語	閩南語	

対象者の背景と見解

・Cは、客家語のみで指導する幼稚園（幼稚園と託児所が合体）を経営している。その理念に賛同する保護者から厚い支持を受けているようだ。祖父が地主で、幼稚園や一軒家をその土地に建てている比較的裕福な家庭のようだ。

・園長Cには独自の客家語教育理念があり、約30年前より既に幼稚園で独自の開発教材での教育を実践している。そのため、政府の本土言語教育政策が既に手遅れであることを憂う。政府が推奨する教材も一切使用していない。

・居住地域には、客家人も多いが、かつての中国語教育で客家語が苦手な客家人も多く、意識して客家語を家族間や居住地域でも使用している。

CS：○対象者自身の見解・●観察者の見解

○Dが本省人で客家語ができないため、Dが家族の中にいる際は、他者は中国語を話す。

●実際に、Dが席を外した途端客家語だけの会話になった。

○客家語以外の言語でも、その物や事象を最も表す表現や単語であれば使用する。

○Aは中国語が聴いて分かるがあまり得意ではなく、Dは客家語が聴いてもよく分からず、AとDの間では会話が成立し難い。

事例3：母語が閩南語（台語）の家庭③ 台北市内中心部

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖父	本省人	60代後半	閩南語	中国語	①閩南語 ②中国語		客家語
B	祖母	本省人	60代半ば	閩南語	中国語	①閩南語 ②中国語		客家語
C	母：息子の妻	客家人	30代半ば	客家語	中国語	①中国語 ②閩南語	閩南語	
D	孫：未就園児	本省人	4歳	閩南語	中国語	中国語	閩南語	客家語

対象者の背景と見解

- ・A：定年退職、B：基金会理事、C：夫婦会社員、戸建て住宅で比較的裕福な家庭。
- ・家族の中で、Cのみ客家人なため、家族間では客家語を話す機会はなく、家族との会話は中国語が主体で、家族が話す台語も聴いて分かる。
- ・台北市内という居住環境から、学校や地域社会では中国語が主体で、二、三世代目も台語の必要性を感じていない。

CS：○対象者自身の見解・●観察者の見解

- 日常生活で一世代目が二、三世代目に対して台語を使うことは、ほとんどないらしい。
- C以外の家族は、客家語が聴いても分からないので、家族間で使用することはない。
- 一世代目は、夫婦間や相手によって台語は使用する。観察中、突然電話が掛かって来た際、祖母はいきなり台語を話し始めた。
- 日常的な端的な表現、例えば、挨拶、注意喚起、称賛、あるいはとっさに出る言葉は、母語だった。

事例4：母語が閩南語（台語）の家庭④ 桃園市内（中壢区）

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖母	本省人	80代前半	閩南語	日本語	①閩南語 ②中国語	日本語	
B	母：娘	本省人	40代前半	閩南語	中国語	①中国語 ②閩南語		日本語
C	孫：高校1年女子	本省人	16歳	閩南語	中国語	中国語	閩南語	日本語

*彼らは「閩南語」を「台語」と称する拘りは、見られなかった。

対象者の背景と見解

- ・B・C夫婦：共働き、台湾特有のテラスハウスで、中流家庭のようだ。
- ・祖母は、小学校で日本語教育を受けたため、戦後70年以上経ち、日常的に日本語を使用する機会がなくても、訪問時に日本人と直接会えたことを喜び、流暢な日本語で話しかけて下さった。し

かし、調査に関する説明や撮影中は、一切日本語は話されなかった。

・三世代目は小・中学校の本土言語教育で台語を選択していたが、毎週1コマという授業の少なさから、あまり効果がなかったという。実際に学校や友人との会話は中国語が主体で、家庭でも台語は聴いて分かるが話すことはほとんどないという。

CS：○対象者自身の見解・●観察者の見解

○家族全員が本省人のため、一世代目と二世代目の会話はほとんど台語だが、三世代目の孫がいる時は全員が中国語を使う。

●実際、一世代目と二世代目が厨房に入った瞬間に、台語だけの会話に変わっていた。

○台語がより明確にその物や事象を表す場合は、混在して使用する。

●物の名称や事象の形容や説明が突然台語に変わることが度々あった。

事例5：母語が閩南語（台語）の家庭⑤高雄市郊外

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖母	本省人	80代後半	台語	日本語	①台語	日本語(少)	中国語
B	父：息子	本省人	50代後半	台語	中国語	①台語 ②中国語		
C	母：息子の妻	本省人	50代半ば	台語	中国語	①台語 ②中国語		
D	孫：長男	本省人	20代後半	台語	中国語	①中国語 ②台語		

*彼らは「閩南語」ではなく「台語」と称したため、尊重し「台語」と記載。

対象者の背景と見解

・B：不動産仲介業、C：専業主婦、D：大学院生

高雄市郊外だが、戸建て住宅の比較的裕福な家庭。祖母は、小学校で日本語教育を受けたが、高齢のため「日本語はもう忘れまして」という言葉だけは流暢に話していた。かつて、日本語は得意であったらしい。

・一世代目は、中国語が聴いても分からず、観察者の中国語での説明は孫が台語で通訳していた。日本教育を受けた後で、中国語で教育を受ける機会がなかったらしい。

・三世代目は年齢的に小・中学校の本土言語教育を受ける世代ではなかったが、家庭、居住環境、地域社会が中国語より台語が主流なため、実際に学校や友人との会話は台語が主体で、中国語の方が得意な本土言語教育世代の弟はいるが家庭では台語だけらしい。

・高雄市は、台湾第2の都市であるが、南部であるため外省人は少なく、戒厳令解除以降は、地域社会は中国語より台語が主流になっているようだ。

CS：○対象者自身の見解・●観察者の見解

○家族全員が本省人で、一世代目は中国語が聴いてもわからないことと地域社会全体が本省人や台語使用人口が多いこともあり、会話はほとんど台語が主体らしい。しかし、稀に固有名詞や中国語がより明確にその物や事象を表す場合は、その部分だけ中国語を使用する。

●個々がほとんど台語の会話の合間合間に中国語が混在していた。

事例 6：母語が太魯閣語の家庭⑥ 新北市内

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖母	太魯閣人	40 代後半	太魯閣語	中国語	①太魯閣語 ②中国語		
B	母：息子の妻	太魯閣人	30 代前半	太魯閣語	中国語	①中国語 ②太魯閣語		
C	孫：小学 4 年女 児	太魯閣人	10 歳	太魯閣語	中国語 太魯閣語	中国語		太魯閣語

家庭環境：

先住民は、約 25 年前より比較的台北市の隣接市に仕事を求め居住し始めた。

事例 7：母語が閩南語（台語）の家庭⑦ 台北市郊外

	対象者	民族	年代	母語	教育言語	得意な言語 ①②	聴いて 分かる言語	聴いても 分からない言語
A	祖母	本省人	80 代後半	台語	日本語	①台語 ②中国語	日本語	
B	父：息子	本省人	60 代半ば	台語	中国語	①台語 ②中国語		
C	母：息子の妻	客家人	30 代半ば	台語	中国語	①台語 ②中国語		
D	ひ孫：幼児園女 児	本省人	6 歳	中国語	中国語	中国語	台語	

*彼らは「閩南語」ではなく「台語」と称したため、尊重し「台語」と記載。

家庭環境：

四世代の内の三世代の観察となった。

B・C：夫婦でパーティーや宴会などのケータリング会社を経営、台北市の郊外だが戸建て住宅で比較的裕福な家庭。インドネシア人の家政婦が住み込みで、祖母の介護とひ孫 2 人の世話をしている。

4.2 対象者自身の CS の規準とインタビューからの推考

前述のように、三世代 6 家族と四世代 1 家族の家族構成やその使用言語などについて見て来たが、ここで各家族自身の見解を整理してみる。

まず、実際に観察した対象者へのインタビューから、以下のことが考察できる。

①要因：成員構成：年長者の使用言語に極力合わせるか、互いに最も分かりやすい言語を選択

会話の内容：限定された間柄以外には分からないよう意図的に言語を選択

単語：互いが最も分かりやすいか、最もその物自体を形容し他者に伝わりやすい言語の単語を

選択

- ②言語の種類：基本的に母語よりも上記の要因を優先
- ③使い分けの瞬間：無意識や言い易さから、思わず口を衝いて出る

次に、インタビューから得られた彼ら自身が考える CS の要因は、以下のとおりである。

実際、これをそれぞれの家庭に当て嵌めて、その母語を維持する意識の強弱で分類すると、下記のようになった。つまり、同じ民族の家庭であっても、住民地域やその環境、あるいは家庭の母語を維持する意識の強弱により、若年層の母語使用能力だけでなく家庭全体の使用状況に差異が生じている推測できる。

家庭の母語を維持する意識：強→②④⑤⑥⑦

家庭の母語を維持する意識：弱→①③

また、直接観察を行った場面で、彼らの会話や行動から彼ら自身が示した CS の要因やタイミングにある程度の妥当性を見出した。しかし、それはあくまでも彼らの見解に基づく検証である。

そのため、筆者は、直接観察した光景を撮影した録画をテープ起こしすることで、データ分析も可能となり、さらに、その会話の内容を詳細に検証することで、その実態がさらに明らかになると考えた。

5. テープ起こしによる CS と会話分析

5.1 テープ起こしから見える CS と相互作用の特徴

まず、撮影データのテープ起こしから、先述 3 章 3.4 の分析枠組みを用いて検討すると、以下の①のような CS の特徴が見られ、②のような会話分析と併せて、分析結果を導くこととした。

①言語学的な観点：単語、句、節での CS は比較的少なく、文全体を別の言語に変える傾向がある。

②社会的な観点：CS する成員が限られている。

これらの特徴から、さらにその CS の要因を分析すべく、特に観察対象者の中心人物を特定し、その立場や役割が会話内でどのような働きをしているかという点との両面から見る。

また、録画データについては、まず業者に中国語へのテープ起こしを依頼し、さらに筆者自らが日本語に翻訳し分析を試みた。その例は、以下のような会話である。ちなみに、筆者は中国語を得意としているが、閩南語（台語）は簡単な会話が可能レベル、客家語は出来ないが聴いて客家語であるということは認識可能なレベル、そして、太魯閣語は全く分からないが観察対象者は中国語か太魯閣語の 2 言語しか話さないことから、中国語以外は太魯閣語と認識し、CS は確認できた。

データ分析にあたり、客家語での会話がほとんどなかった事例 1 の「母語が客家語の家庭①台北市内郊外」と四世代家族の事例 7 以外の事例を使用する。

なお、文字化する際、日本語ではあるが、分かりやすくするために上昇イントネーションに「？」を付けることとした。

事例2：苗栗県家族の会話

A 祖父：80代半ば・B 息子：60代前半・C 息子の妻：60代前半

D 孫＝長男の妻：30代半ば・E 息子の妻の従妹：50代半ば

例1：

家族全員が一つのテーブルを囲み、お茶とお菓子を楽しみながらの会話である。D以外の成員が、客家語が聴いてもあまり分からない上、客家語のテレビを観ないDのために中国語を使用する場面があった。

A：出て来たよ。全て客家のだ。コミュニティのだ。

E：お父さんは、17チャンネルを観ているのではないの？

D：17チャンネルって何？

E：客家テレビよ。

B：客家テレビだよ。

C：違うわよ（Aに向かっての発言）。今は客家チャンネルがあるからで、お父さん、お父さん、以前は客家チャンネルはなくて、客家チャンネルで我々客家人を重視したのが観られるだけよ。ここ十数年のことよ。今は（客家チャンネルは）あるわよ。

E：客家語を比較的配慮して重んじているのよ。

A：ハイライト放送は、終わった。

*ゴシック太字部分だけ、中国語。それ以外は、客家語。

会話の中心人物はEである。Cは一回のスピーチ量は多いが、CよりもEの方が中国語が得意なため、この会話では発話の中心人物もEが担っているようだ。

Aが発話した客家専門チャンネルについて、BCEが中国語で説明し、テレビ局と番組について、CがAに客家語で説明しているが、その最後に敢えてDへの配慮からか中国語で「今は（客家チャンネルは）あるわよ。」と言い、Eも念を押すように「客家語を比較的配慮して重んじているのよ。」と中国語で言うことで定式化（formulating）が起きている（好井1999）。

つまり、成員の中でEが話題をまとめる役割を果たそうとしている。また、もし、Dが同席しなければ、中国語を使う必要はないが、D以外にも中国語はできるため参加者全員の「参加が承認されている」Dへの配慮と「団結」を示すCSであると推察する。

例2

前述の例1同様、家族全員で一つのテーブルを囲んでいたが、途中AB間とCDE間の会話が異なる場面があった。以下のCDE間の会話では、CDが勤務する幼稚園での出来事に話題が及んだ。

E：今子どもたちに教えているから、どうしても（客家語）を話さないといけないわよね？

D：子どもに教えるのとは、また違うわ。子どもたちに教えるのは、簡単な（客家語）だけで良いのよ。基本的な表現よ。

E：子どもたちは、みな話せるわよ。

D：本当？

E：上手に話せるわよ。

C：お弁当を渡す時、ある子どもはお弁当を見たら喜んで、またある子どもはどれが自分のか分からなくて取り合いになって、これは私のだとか違うとか言って、泣いたり、持ったまま人に渡さなくて、私があの子はどうしてないのかと尋ねるとこのお弁当は私ので、あの子が間違っって人のを取ったから、私はあの子を取ったと答えたのよ。それで、このお弁当が明らかにあの子のだと分かるのに、どうして人を取るの。そうじゃないの。これは、あの子でしょ。ちょっと置きなさい。一体これは誰のですかと言ったら、後ろの子がこれは私のだと言って来たの。それで、私がそれを持って、それはあなたのですかとその子に尋ねたら、その子は違うと言ったから、私はどうやらあの子のではないと思って言ったのよ。

E：あの子は、嘘つきよ。

C：あの子は、嘘つきだわ。

D：あの子は、あまりはっきり分からない言葉があるのよ。あの子は、(あなたが話す)中国語が聴いてはっきり分かるとは限らないと気付いたの。言葉の順序が変わるからよ。

C：私の中国語が？

E：あー、もしかすると小さい頃から客家語を話していたら、聴いて分からないということはないわよ。

C：(Eさんの)妹さんは、中国語が話せるの？

E：中国語？だから、私たちは小さい頃から、客家語を話して来たから、中国語は聴いて分からないのもあるのよ。

*ゴシック太字部分のみ客家語。それ以外は、中国語。

会話の中心人物はEである。CDE間のみの会話で、客家語が聴いてもあまり分からない「参加が承認された者」Dへの配慮として中国語をベースに話していたが、途中Cにより長文の中に句の単位で客家語へCSが生じた。その客家語の内容は、幼稚園のある園児を批判する内容で、感情的な意味合いもあり、Dに聞かせたくない配慮か、あるいはCE間のエスニック・グループ的な「団結心」からか、Cは同じ母語のEにのみ話し掛ける「分離」が起き、両側面の意図的なCSが生じたとも考えられる。しかし、結局、Dはその前の中国語の脈絡から、CとEの会話に介入し、CE両者にCSが生じ中国語に戻った。

事例3：台北市家族の会話

A：祖父 60代後半・B：祖母 60代半ば

C：AB息子の妻 30代半ば・D：孫(Cの娘) 4歳・E：Cの同僚 40代前半

家族全員が居間でくつろぎながら会話している場面である。家族の中でCのみが客家人で、C以外の成員は客家語が聴いても分からない。そのため、Cは家族間で客家語を話すことはなく、自

分の子どもたちにも客家語は使用しないらしい。

会話中に、Dがあちこちに歩き回ったため、途中でDを注意する発話もあった。また、話題の中心は、同席しないDの姉に関する内容であった。

C：そうだ。お姉ちゃんは？お姉ちゃんはどこへ行ったの？

E：お姉ちゃんは、スケートに行ったよ。(Dちゃんも)スケートに行かないの？

D：行かない。

B：(お姉ちゃんは、)あんなに細いから、滑ってもきつととても軽いわ。細過ぎるわ。ブー(ディズニー映画：モンスターズインク)に食べられてしまったんだわ。

E：そんなことないわ。お姉ちゃんは良く食べるわ。お母さんよりも食べるわ。

B：でも、彼女はこんなに(手で細さを表すようなしぐさ)細過ぎるのよ。

E：それでも、お姉ちゃんは、運動量が多過ぎるのかそれとも。

C：靴を履き間違えているわ。履き間違っているって。

B：多分お姉ちゃんの栄養の吸収も関係があるんじゃないの？

E：多分栄養の吸収が悪いのかもね。お姉ちゃんはしっかり食べている。少なくないわ。

B：お姉ちゃんは、もう食事をしたの？

E：したわ。でも、あの子は、麺を食べるのが好きなの。

B：麺でも構わないわ。彼女たち二人とも麺を食べるのが好きです。麺を食べるのは構わないわ。健康だったら良いのよ。

C：靴を履き間違えているわ。そっちに行って何をしているの？

A：そっちに行って何をしているの。出て来なさい。

E：ただ、時々お姉ちゃんがあんなに細過ぎるのを見ると、後ろから見たら全体が骨のようなの。

B：そうよ。十分細いわ。骨と同じだわ。

C：そうよ。あの子(=お姉ちゃん)の手を触ったら、すごく細いの。

B：そうよ。我が家はみんな色白で柔らかいのに、どうしてあんなに細いの。

C：あの子は、たった35kgなの。

B：細過ぎるわ。私なんかもう76kgあるわ。

E：私はお姉ちゃんにこれ以上肉が付かなかったら、お肉で骨を包めないわよと言ったことがあるのよ。

B：高くジャンプできないし、背が高くなり様がないわ。引っ張っても伸びないわ。

A：お姉ちゃんは、海鮮ばかり食べているんだ。(Cも)ちゃんとお肉を使って彼女に食べさせないと。

B：タンパク質が多過ぎても良くないわ。

*ゴシック太字部分だけ、閩南語。それ以外は、中国語。

会話の中心人物はBである。日常的にはAB間では閩南語が主体だが、三世代が集まる場面で

は、会話のベースは、CD に配慮して中国語を使用しているらしい。つまり、全員が使用可能な中国語を共通語として使用することで、家族全員が互いに「参加が承認された者」として配慮している。

また、話題の中心は、同席しない D の姉について、最初は D が分かるレベルの閩南語で敢えて D に聞こえるように「ブーに食べられてしまったんだわ」と言っている。しかし、その姉妹の母親への注意喚起に及んだ場面では、中国語では D が聴いて分かるため、敢えて閩南語に CS している。前者は、感情的な表現を相手に聴かせるために CS しているとも考えられる (Goffman 1981)。そして、後者は、「指定されていない受け手」D の「言語能力の差異を利用」し、相手が理解できない言語（コード）を選び、なおかつ、AB が D との「直接対話の回避」をしているように見受けられる。

事例 4：桃園市内家族の会話

A 祖母：80 代前半・B 娘：40 代前半・C 孫 高校一年生（女子）：16 歳

ABC 3 名で会話する際は、A が BC に配慮して中国語が主体であったため、ABC 間と AC 間の別々の会話場面を使用する。

最初は、ABC が居間で話していたが、途中 A が晩御飯の準備に厨房に入った。

その後、B と C が A を手伝うため厨房に入った際の会話である。

例 1：

B：おばあちゃんにお皿がいるか聴いて。

C：おばあちゃん、お皿はいるの？

A：いるわよ。

C：小さいの？

A：大きいの。

C：大きいのね？

C：大きい。まだ小さい？

A：大きなお皿。

A：もう少し大きい。もう少し大きい。

C：はい。

C：はいどうぞ。持って行くの？私が持って行くわ。

*ゴシック太字部分だけ、閩南語。それ以外は、中国語。

会話の中心人物は A である。A は閩南語があまり話せない C に対して、日常的に中国語で会話することで「指定された受け手」への配慮している。しかし、A が中国語で何回言っても C が分からない時に、A は業を煮やしてか閩南語に CS し、「言い直し」で再確認する場面があった。それでも、C は聴いて分かるので、コミュニケーションは成立する。A が C の言語能力を見積もって、閩南語を使用したと考えられる。

次に、BだけがAを手伝うため厨房に入った際の会話である。

例2:

A:火をもう少し大きくして。もう少し大きくしないと良くないわ。

B:換気扇を掛けるの?これで良いかな?掛けたら音がするから、切るわ。これで良いわ。

B:火をつけて、それから。全部入れるの?

A:全部入れて。これはお箸を使わないわ。火を強くして。

B:葱の卵炒めなの?

A:葱の卵炒めよ。

A:卵を掻き混ぜたの?

B:掻き混ぜたわ。

A:その卵は、広がるようにかき混ぜて。

B:混ぜ方が足りないわよ。

B:入れたらすぐにひっくり返すの?私は、いつもちょっと置いてから裏返しているわ。

A:炒めた感じを見て。

B:こんな感じで良いの?

A:そう。いいわよ。ご飯にしよう。

A:(皆に向かって)ご飯よ。

*ゴシック太字部分だけ、閩南語。それ以外は、中国語。

会話の中心人物はAである。Aは母語の閩南語も中国語も流暢であるが、閩南語よりも中国語が得意なBに対して、中国語を交えて「参加が承認された者」への配慮をしながらも、AB互いの得意な言語を交えて会話することでコミュニケーションはよりスムーズに流れる。双方の得意な言語を混在させた会話であるが、アイデンティティや共同体意識の強さにより成立し、CSが「団結」を示しているのではないだろうか。AがCと会話する時よりも、ABともに母語の割合が多くなっている。

事例5:高雄市家族の会話

A:祖母・B:息子・C:Bの妻・D:BCの長男

会話の冒頭の話題は、同席していない次男のバイクが故障した話から始まった。

次男以外の家族全員が家の庭に置いてある大きなテーブルに腰かけ、お茶を飲みながら話している。

C:あの子のバイクが壊れたの。スクリュベットの辺りが故障したのよ。あの子は、あの何とかいうチームのトレーラーの救援を探したのよ。

D:救援?道路の。道路救援(隊)のことだね?

C:そうよ。あの大木のそばにある家の車の修理店まで牽引されて行ったの。

D：その店はまだ営業しているの？そのお店は、夜まだ営業しているの？

C：営業していて、最初 1,500 円で修理するって言っていたのに、修理が終わって 4,500 元掛かったと言われたわ。

A：お金は支払ったの？

C：支払ったわよ。どうして支払わないはずないわよ。トレーラーを呼んで修理までしてもらって 4,000 いくら掛かったわ。

B：4,000 いくら。

C：トレーラーが 1,500 円で、それ以外にまだバイクの修理代が要ったのよ。合わせて、4,000 か 4,500 元と言われたわ。

A：多めにお金を持っておかないといけないわね。そうでないと。

B：あの子（次男）に言わないでね。

D：あの子は、1 時間遅れるって言っていたよ。（お母さんは）昨日あの子の代わりに（修理したこと）をあの子に言ったの？

C：昨日帰って来たわ。あの子が帰って来た時おばあさんは寝ていたのよ。あの子が帰って来た時おばあさんは寝ていたのよ。

B：（自分が）あの子にちょっと来るように言ったんだ。それで、あの子にこっちに来てちょっと座れと。

A：あんた（長男 D）みたいに物分かりが良かったらね。

A：それに比べてあの子は年も若いし、物事が分かっていないわ。

B：人にも奢らせるのよ。

C：そんなことないわよ。（夫 B の）考え過ぎよ。

A：私は心配で心配で仕方ないわ。

*ゴシック太字部分だけ、中国語。それ以外は、台語（閩南語）。

会話の中心人物は C である。この家族は、A が中国語を聴いても分からないこととアイデンティティの意識が高いこともあり、互いに「参加が承認された者」への配慮として、日常的に中国語を話さないという生活を送っているようだ。そのため、会話での中国語への CS は、非常に限られている。但し、敢えて使用していた場面は、次の 2 点である。まず、1 点目は、台語での名称がなく、C が止む無く中国語に「置き換える」場合ともう 1 点は、C の A への配慮のために CS が生じていると考えられる。後者は、「指定されていない受け手」A の「言語能力の差異を利用」し、相手が理解できない言語（コード）として中国語を選び、聴かせたくない内容は CS により意識的に「直接対話の回避」していると推察する。この際に、C が同じ内容を中国語で二回繰り返しているのは、A に知れたら気をもむので分からないようにして欲しいという思いやりからか、A 以外の成員にサインを送っているようだった。

しかし、この家族は、相当意識しないとすぐに台語に戻るため、結局 A の耳に入ってしまった。

事例6：新北市内先住民家族の会話

A：祖母 40 代後半・B：娘 30 代半ば・C：孫（B の娘）10 歳（小学 4 年）

居間のソファで 3 名並んで腰かけ話している場面だ。会話の冒頭だけ、3 名が中国語と母語を交えて話し、その後は AB 間だけ会話することになり、その際には両者ともにほとんど母語のみとなった。そのため、3 名の短い会話を使用する。

B：母語認定試験はどうだったの。コンテストがあるわよね？緊張しないでいいから。

A：何点だったの？

C：え？

B：結局、テストは終わったのよね？どうなの？

C：簡単だった。

B：簡単だったの？

A：試験はとても簡単なのよ。

B：もう少し話してみて。

C：分からない。

B：日頃聴いているように話してみて。

*ゴシック太字部分だけ、太魯閣語。それ以外は、中国語。

会話の中心人物は B である。C は、ほとんど母語を聴いても分からず、話すこともほとんどできないため、AB が「指定された受け手」C への配慮からか、C の答えられそうな話題で母語の発話を促した。C の答えに A が優しく同じ言葉で「言い直し」でフォローしているようだ。

5.2 テープ起こしによる会話分析結果

本研究では、台湾の異なる言語を使用する三世代家族の日常の会話を取り上げ、成員同士の相互作用として生じる CS の特徴や暗黙のルール、さらに成員の受けた言語政策の差異による言語使用への影響を中心に分析した。そして、特にテープ起こしから明確になった分析結果は、主に以下の 4 点である。

まず、1 点目として、会話の中心人物の存在に特徴があった。いずれの三世代家族の会話においても、必ず会話をリードする中心人物の存在があり、その役割は、司会進行、順番交替、行為の連鎖などであった。しかし、各々の家族を比較してみたところ、年代には共通点はあるが、世代との関連性は特にはなかった。

そこで、他の要因を探ってみると、興味深い共通項として、中心人物は教育言語による弊害を受けていた可能性が見出せた。例えば、会話の中心人物は、現在 40 代後半から 60 代後半の年齢層に集中している。そして、その要因として、学生時代に母語使用が許された時期と母語使用が禁止され学校だけでなく公共圏でも、中国語のみ使用を強制された時期（1967～1987 年）を過ごしたことが推測される。

特に、60代は小学校時代にまだ言語統制を受けておらず、使用言語の基礎が母語であった。そのため、言語統制後は母語も中国語も互いに影響を与え合い正確な習得ができていないと考えられる。そして、その中心人物にとってのマイナス要素とプラス要素も見て取れた。前者は、1言語のみでの深く難しい表現が苦手なため、2言語を混在する傾向にあり、1言語で明確に表現し切れないような言語レベルである。そして、後者はどちらも聴いて分かるだけでなく、話せることで、会話可能な相手が比較的広がるという利点である。

次に2点目として、彼らの使用言語と母語の使用比率には、言語政策と教育制度が大きく影響していると考えられる。各家庭において、上記1点目の会話における中心人物になった世代以外は、ほとんど自らが得意な言語のみで発話している。その得意な言語は、年齢は関係なく中国語か母語のいずれかを使用している。しかし、若年層は、学校で母語教育（本土言語教育）を受けていても、母語が苦手な傾向にある。

また、3点目として、母語と得意な言語が一致するケースと異なるケースが見られた。例えば、前者は、成員各々が教育言語と関係なく、母語が比較的得意であればそれを使用する傾向にある。また、幼少期、日本の統治下で日本語教育複数年受け、個人の中で日本語が最も得意な時期があったとしても、戦後国民党政権下で日本語使用が禁止され、苦手な中国語よりも、母語を使用するようになった。実際、家庭内でも日本語が通じる相手がいなくなると使用する機会も激減した。また、後者は、元々、母語が最も得意であったが、国民党政権下の言語統制で中国語を強いられ、母語の使用頻度の減少とともにそのレベルも低下した。そのため、日常的に中国語を使用するようになった。

最後に4点目として、理解できる言語に限られている者に合わせて、言語を選択している状況が見て取れた。例えば、ある成員が1言語しか聴いて分からない場合は、他の成員はその者に合わせてその言語で会話する。この状況が特に顕著だったのは、中国語を共通語として使用していた観察対象者①の台北市郊外と③の台北市中心部の家族であった。また、母語を共通語としていたのが、観察対象者②の苗栗県（客家語）と⑤高雄市郊外（台語）の家族であった。

また、別の例として、成員同士で互いに異なる言語が使用できるかあるいは聴いて分かるレベルであれば、互いに得意な言語を使い分けしながら会話する状況も見られた。それは、観察対象者④の桃園市内（中国語・閩南語）、⑥の新北市（中国語・太魯閣語）、⑦の台北市郊外（中国語・台語）の家族であった。

6. まとめ

今回のフィールド調査を終えて、実際に観察対象者の許可を得た録画やインタビューのデータ分析を行い、観察対象者の各々の年齢層、階層、職種、居住環境なども異なり、その家庭内外の教育や地域環境が与える家庭内の言語使用の差異も浮き彫りとなった。例え、同じエスニック・グループの家庭であったとしても、使用言語に顕著な差異が見られた。

結果的に、今回の観察の着目点としていた2種類以上の異なる言語の切り替えであるCSについては、彼ら自身無意識や習慣による使い分けの暗黙のルールと解釈していた。しかし、撮影記録を

テープ起こしした会話から、トランスクリプトを作成し、エスノメソドロジーの手法で会話分析することで、個人個人の言語習慣やこれまで受けて来た言語政策の影響以外にも、会話参加者の相互作用により、会話が遂行し成立するという現象が見受けられた。

このように、多言語・多民族社会の特に家族の会話分析において、まず、家族や親族へのインタビューで彼ら自身の無意識の暗黙のルールにより、彼らの会話が成り立っていると認識していることが感じ取れた。そのルールとは、仮説どおり家族や親族間の成員同士が、CSにルールのような共有した秩序としての他者（他の成員）に対する尊重と配慮が主であった。しかし、それ以外にも彼らは表明しなかったが、意識して会話の主導権争いする場合と中心人物となり得る要素（複数の言語使用や成員内での地位など）を備えている結果、主導権を得ているという点も明確になった。

それは、三世代家族の世代毎が過ごした異なる統治時代の使用言語、言語政策、教育言語の影響を受けながら、彼らが止む無く意に反して母語ではない言語の使用を強いられた時代を潜り抜け、今に至った結果現れた姿のようにも見受けられた。これは、統治された多言語・多民族社会が共同体を保つために、その社会の市民である成員が生きるすべとして身に付けたルールのようなものである。

そして、興味深い特徴は、以下の3点である。まず第1に前述のような会話の中心人物が三世代の会話の相互行為を円滑にし、バランスと秩序を保つ役割を果たしている。そして、第2に社会の中の一つの単位としての家庭という小さな社会で、異なる言語を使用する三世代家族の共生に、中心人物が大きな役割を担っている。しかしながら、第3に家族内に中心人物と同様の背景を持つ男性が存在しても、他者を配慮し主導権を持っているのは、中心人物である女性であった。但し、このような女性というジェンダーとしての役割は、分担としてあるのか、権力関係から起きている現象なのか、あるいは、台湾社会特有のものなのか、その要因については研究の余地がある。

7. 今後の課題と展望

今回のフィールド調査の経験と結果を踏まえて、今後は調査対象を台湾の家庭から社会全体に目を向け、特に2017～2019年に台湾の現政権が取り組んでいる本土語言教育を中心とした言語政策や教育制度における民族主体化と政策の実践へ向けた大転換期に焦点を当て調査を進める予定である。

その理由として、台湾では従来の民族の言語に加え新たに新移民（新住民）東南アジア7カ国の言語の教育も必要となり、義務教育における母語教育に留まらず、特に東南アジア7カ国からの移民一世である母親への教育と就職活動も強化される。それにより、母親の教育水準や経済状況が向上し、家庭環境も改善が見込まれ、その子供である二世の学校教育への適応が進むと期待されている。そのため、リアルタイムで遂行されている台湾の言語、教育、経済政策の改革を具に観察でき、研究に活かせる絶好の機会と捉えている。

今後の調査予定としては、フィールド調査は、2018年11月末に台湾で実施される市長選挙における演説の使用言語の観察や台湾で使用人口の割合が約7割と最も多いと言われている台語の復興推進運動に長年取り組んで来た活動家へのインタビューも視野に入れている。また、文献調査とし

て、2016年より推進している東南アジア7カ国からの新移民（新住民）とその子供の潜在能力を引き出し、就業の機会を提供し、社会参加と国際競争を促進するための計画（法案）や2011年より順次実施している「十二年国民基本教育政策（小6+中3+高3年）」の効果と弊害にも注目して行く予定である。

謝辞

今回、インタビューや観察にご協力頂いたご家族と研究者の方々に改めて感謝申し上げます。

また、その対象者をご紹介頂いた国立政治大学民族学部主任王雅萍副教授、新北市内烏来小中学校高秀玉教諭、国立中央大学附属中壠高級中学日語教師范清美先生、台南市医療検査士陳姿伶氏、大阪大学名誉教授西村茂雄先生に感謝申し上げます。

そして、研究費により今回台湾での貴重なフィールド調査の機会を与えて頂いた本学に改めて感謝申し上げます。

〈参考文献：言語関連〉

- 洪惟仁, 1995, 『未來台灣都市的華語化』 國立清華大學人文社會學院台灣研究室.
洪惟仁, 1995, 『台灣的語言戰爭及戰略分析』 國立師範大學《第一屆台灣本土文化學術研討會論文集》.
洪惟仁, 2002, 『台灣的語源政策何去何從』 學術研討會／私立淡江大學.
施正鋒（編著）, 2002, 『語言政治與政策』 我國族群政策與法制之設計學術研討會.
何貽謀, 2002 『台灣電視風雲錄』 臺灣商務印書館.
林全, 吳聰敏（共著）, 2006, 『臺灣教育400年』 經典雜誌編著出版.
何萬順, 2009, 『衝突抑或相容?』 國立政治大學語言學研究所.
田中克彦, 1981, 『ことばと国家』 岩波書店.
陳培豐, 2010, 『「同化」の同床異夢－日本統治下台湾の国語教育史再考』 三元社.

〈参考文献：言語の切り替え（code-switching）〉

- Shana Poplack, 1980, "Sometimes I'll start a sentence in Spanish y termino." en esoanol: Toward a typology of code-switching. *Linguistics*, 18.
東照二, 2009, 『社会言語学入門〈改訂版〉生きた言葉のおもしろさに迫る』 研究社.
山本雅代, 2013, 「受容バイリンガルの言語使用」, 『言語と文化』, 16号 37-46 関西学院大学言語教育研究センター紀要委員会.
張學謙（國立台東大學華語文學部）, 2016, 「從單語到雙語教學：語碼轉換在語言教育的運用」 『台灣語文研究』 11(1) : 1-25 (THCI core).

〈参考文献：会話分析〉

- Blom, Jan-Petter & John Joseph Gumperz, 1972, Social meaning in linguistic structure: Code-switching in Norway. In J. Gumperz, & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
Gumperz, John. J, 1982, *Discourse strategies: Studies in interactional sociolinguistics I*. New York. Cambridge University. (=2004, 井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘訳, 『認知と相互行為の社会言語学』 松柏社).
Goffman, Erving, 1981, *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
宮脇幸生, 1984, 文献紹介, Erving Goffman, "Forms of Talk", 『ソシオロジ』, 29(1) : 127-138.
好井裕明, 1999, 「制度的状況の会話分析」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社, 6-70.

〈言語政策・教育制度に関する参考文献〉

- 鄧運林, 1995, 「從教育發展趨勢看台北縣教育改革計經驗」尤清主編, 『台北縣教育改革經驗』復文圖書出版社, 7-37.
- 中野裕也, 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編, 2009, 「台湾南部 T 郷に見る原住民族の母語教育——郷土言語教育の現状と可能性」『言語・文化コミュニケーション』慶應義塾大学日吉紀要, 41: 119-133. (2017年9月9日取得, <http://iss.ndl.go.jp/bs/R100000002-I000000062969-00>).
- 李雄揮, 2004, 「台湾歴史各時期語言政策之分析比較」, 台東大學語言人權與語言復振學術研討會報告原稿.
- 王甫昌, 2003, 『當代台灣社會的族群想像』群學出版有限公司.
- 山崎直也, 2001, 「九年国民教育政策の研究－戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」『日本台湾学会報 (第3号 2001年5月)』50-69.
- 張建成, 2000, 「台湾地矩区的郷土教育」張建成主編『多元文化教育－我們的課題与別人的經驗』師大書苑, 45-61.

(原稿受付: 2018. 10. 31 掲載決定: 2019. 1. 17)

The ways of coexistence in multilingual and multi-ethnic Taiwan :
a case of multilingual conversations among family members

Yukiyo Saito

Abstract

This study explores the reasons for communication and dialogue can be established in Taiwanese society with multiple languages and ethnic groups, even though the languages used in three-generation families are different. Furthermore, learning more about the coexistence of multiple languages in the above-mentioned families is also a purpose.

To complete this study, field survey was conducted last September and December in Taiwan. The differences between the languages and the languages used by three-generation family are also the observation standards. When choosing the three-generation families, the languages, the composition of the ethnic group, age, occupation, education level, economic status, living environment, and balance of classes were taken into consideration.

From a sociological point of view, this study uses the ethnomethodology for dialogue analysis, and assumes the families share a silent understanding to the basis of communication and dialogue. This study also observes daily conversations of different nationalities which use different mother languages in one family.

On the other hand, from the perspective of linguistics, code-switching is also a focus of this study. Through the analysis, a total of seven observations, fourteen interviews, and five field surveys were conducted. And it was found that different ages, classes, occupations, living environments, education, and growing environments cause the differences of the respondents' languages. For example, a family composed of two identical ethnic groups, can use significantly different languages.

In addition, this study analyzes the content of the dialogue through the ethnomethodology. After transcribing a taped the shooting videos, it turns out that the respondents believe their own code-switching is only based on silent understanding, which is not absolutely correct. On the contrary, there are other factors that they may not have noticed, but constitute the cause of the status and role in between the members from the interaction.

Key words : Taiwan, multilingual, ethnic group

(Received October 31, 2018/Accepted January 17, 2019)